

青森市に於ける工業地域について

尾 崎 雅 子

青森市は県内では工業のさかんな地域となっているが、その現状と今後について、また工場はまともってみられるが、その立地条件などについてみてみたいと思う。

青森市は工場数に於いては県内で一番多いが、その大部分は従業者数10人以下の個人経営による小規模な中小工場である。業種別では食料品と木材、それに附随した家具、装備品製造業以外はあまりみるべきものがない。

食品工業の中の水産加工についてみると、その主なものは罐詰、焼竹輪、かまぼこなどである。青森市がこのように水産加工がさかんなのは才1次大戦後、日本でも有数の鮮魚集散地となってからで、それらの鮮魚を原料にしている。罐詰、焼竹輪は経営規模が割合大きい方である。これら水産加工場の分布は、安方、新安方、浜町と堤川周辺から相馬町の海岸線に沿って、そのほとんどがある。前者は青森港に近く、しかも鮮魚の集散が行なわれている市営の魚市場をひかえている。一方、後者は規模の大きい工場が多いが、ほとんどが焼竹輪工場で、市内八工場の全部はこの地域にある。焼竹輪はさめ、鰯などを主原料にするため非常な臭気をもなう。そのため街中であっては困るので、海岸近くで、しかも地価の安いこの地域が条件を満たしているといえる。

交通の便利さ、鮮魚の集散地ということから、魚市場のある安方、新安方のあたりの海岸に面して冷蔵庫群が建ち並んでいる。

木材工業にあっては、青森県は林野面積が多く、しかも下北、津軽両半島では特に広い面積を占めているが、ほとんど国有林である。青森市に明治年間に営林局ができて以来、林政の中心となり、木材集散地となった。その木材を利用して製材業がさかんになった。その工場の分布は、沖館から油川にかけての地域と、堤川の川口から浪打、八重田の海岸近くの地域にみられる。木材工業の場合、原料の原木が得やすいということが大きな条件の一つで、しかも貯木には広い敷地を必要とすることから地価の安い所でなければならない。原木は津軽、下北半島から小廻船やいかだを組んで送られてきたので、海岸や川口が便利である。これらの条件を満たすのが、そのような地域であった。しかし現在では、トラック輸送が増え、市の内部へも進出している。

製材工場は企業の合理化をねらって、沖館、油川地区に木材コンビナートを建設しようとしている。共同化によって機械化も可能となり、何にもましてよいことは、自工場に一番割のよいものだけをやるという、専業が可能となることである。この計画の実現にあっては政府から

の援助もあるが、多大な自己資金も必要であることから、現状では大きな製材工場しか加入できない。このような共同化が実現された木工団地についてみるならば、39年に建設されて以来、共同化ということは完全ではなく、一部になされているだけだが、専門化は指導者によって意図的に行なわれている。大きな借金を抱えてこの団地で成功するためには、今までの注文生産から量生産に切りかえなければならないが、その段階に踏みきれないものも多い。しかしともかく協業化によって、金融機関の信用を増し、機械化も容易となり、共同仕入れ、販売によって経営費が少なくて済むという大きな利点がある。この入団に際しては自己負担金が多いので、一部の有力な業者が入ったにすぎない。このような利点があるので、政府からの援助がもっと必要だといえる。

青森市の都市計画にあっても工場地域は重要なものとなっている。現在の工場地域は準工業地域とし、更に工業地域として、油川、新城に西部団地、原別に東部団地を計画している。交通の便もよく、地下水、河川水も豊富であるし、地価も田畑で安いところから、今後大きな期待を持たれる。